関連する『つまずきポイント』

①自分の考えをもつこと

④複数の条件を踏まえて書くこと

書くこと領域

- 論理の展開を工夫し、自分の考えを書くこと
- 複数の条件を踏まえて書くこと

に関するつまずき解消に向けた系統的な取組

養父市立養父中学校の実践

第3学年　ことわざと体験を結び付けて、2段落構成の作文を書く

第2学年　筆者の主張に対し反論する（否定的な）文章を書く

第1学年　「根拠・理由」を明らかにして、説得力のある文章を書く

	身に付けさせたい力の系統	各段階におけるつまずき
第3学年	効果的な伝え方を工夫して、説得力のある文章を書くこと。	構成を工夫して書いたり、複数の条件のある作文を書いたりすることができない。
第2学年	共通点や相違点を明らかにして、批判的な文章を書くこと。	相違点や根拠を明らかにして文章を書くことができない。
第1学年	伝える相手や目的を明らかにして、筋道の通ったわかりやすい文章を書くこと。	筋道の通った根拠のある文章を書くことができない。

つまずき解消に向けた取組の視点

①推敲の観点（1.語句の係り受け、2.文末表現、3.指示された条件）に沿って、書いた文章を練り直すことを習慣付ける。

→自分の書いた文章を客観的に見直し、わかりやすく書き直すことができるようになる。

②教材に応じて多様な表現活動を提示したり、ワークシート・評価（交流）を工夫したりして、書くことに対する苦手意識を軽減する。

→何を、どのように書けば良いのか、手順や内容が理解できるようになる。

第1学年 書くこと②

「根拠・理由」を明らかにして、説得力のある文章を書く

つまずきの実態
～こんな生徒の姿が見られませんか？～

根拠や理由を明らかにして、筋道の通った文章を書くことができない。

考えと理由の入り交じった文章を書くことはできるが、接続語を用いて筋道立てて書いたり、段落構成を意識して文章を書いたりすることができない。

【生徒作文】＊作者が伝えたかったことを考えよう

作者は作品の中で、ヒロシマ、ナガサキ、ヒロユキを全てカタカナで書いて、そこを強調していると思ったので、戦争によって若くして亡くなった人々のことを一生忘れてはならないことと、戦争は一生してはならないということを伝えたかったのだと思います。

「大人になれなかった弟たちに……」（光村図書１年）

実践の概要

単元名　いにしえの心にふれる
『蓬莱の玉の枝 ―「竹取物語」から』　光村図書

目標	「竹取物語」が千年以上にもわたって語り継がれている理由を考え、筋道の通った文章にまとめる。（3段落構成、接続語を用いる。）
内容	• ストーリーや人物設定、心情描写などに着目し、「竹取物語」の魅力を整理する。 • 班で交流する。 • 「考え」「根拠・理由」「まとめ」の3段落で書く。

学習内容の系統と各学年に見られるつまずき

	学習内容（単元名）		つまずきの実態
第3学年	慣用句・ことわざ・故事成語	➡	論理の展開を工夫して、筋道の通った文章を書くことができない。
第2学年	論理をとらえて	➡	筆者の主張に対し、根拠を明らかにして反論する（否定的な）文章を書くことができない。
第1学年	いにしえの心にふれる	➡	根拠や理由を明らかにして、筋道の通った文章を書くことができない。

単元末の目指す姿

- ①考え、②根拠・理由、③まとめの順で、筋道の通った文章を書くことができる。
- 考えと根拠を羅列するのではなく、接続語を効果的に用いて書くことができる。
- 根拠の提示の仕方によって説得力に違いが生じることを理解して書くことができる。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❶

★深い学びにつながる実践

作品の面白さや魅力について自分なりの考えをもたせ、その後、班で交流させる。

活動のねらい▶ • 多様な考え方があることを知り、自分の考えを伝えようという意欲が高まる。

ここがポイント

根拠となる出来事や文、言動などを教科書だけでなく関連資料（図書室の本、インターネット、絵本、資料集等）からも探させる。これにより教材への関心が高まり、多様な視点から教材を鑑賞することができる。また、調べたことや考えたことを文章にまとめて友達に伝えようという意欲につながる。

資料を根拠にした考えの交流

（期待される生徒の姿）

- 考えの裏付けとなる根拠について話し合わせることにより、多様な考え方にふれることができる。また、教科書以外から根拠を探し出すことにより、考えに具体性や客観性が増し、説得力のある文章を書くことにつながる。
- 複数の資料を用いて、比較したり関連付けたりしながら、論を説明するために必要なことを考えることができ、深い学びにつながる。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❷

• 「はじめ」（考え）→「中」（根拠・理由）→「終わり」（まとめ）の3段落で書くよう指示する。
• 段落のはじめに、接続語を用いるよう助言する。

活動のねらい▶ • 段落のまとまりやつながりを意識して、論理的な文章を書く。

ここがポイント

根拠・理由を複数挙げさせ、どの順で用いると良いか検討することにより、論理的な文章展開や接続語を意識するようになる。また、「3段落構成で」と構成を指示することにより、段落ごとのまとまりや内容が明確になり、すっきりとしたわかりやすい文章になる。

生徒作文

＊「竹取物語」の魅力を考えよう！

「竹取物語」が千年もの間語り継がれてきた理由は、空想と現実がほどよく合わさった物語だからだと思います。

例えば、現実的な点でいうと、かぐや姫に言い寄る５人の貴公子は実在する人物をモデルにしていて、その人達の言動も人間らしく描かれています。また、非現実的なところは、竹の中に三寸ほどの子どもがいたり、月から天人が迎えに来たりするところです。

このような理由から、これから先も「竹取物語」は語り継がれていくと思います。

第2学年 書くこと②

筆者の主張に対し反論する（否定的な）文章を書く

つまずきの実態
～こんな生徒の姿が見られませんか？～

筆者の主張に対し、根拠を明らかにして反論する（否定的な）文章を書くことができない。

「君は『最後の晩餐』を知っているか」（光村図書）を読み、筆者の主張に反論する意見を書く

「最後の晩餐」を今まではルネサンス時代の名画の中の一つとして見ていた。だがこの論説文を読み、この絵が単純な絵ではないことがわかった。見る人の心をつかんではなさない「最後の晩餐」、この絵に隠されたトリック、レオナルドの天才的な発想とその才能に私は驚嘆した。この絵はただ美しいだけではなかったのだ。やはりレオナルドはとてつもない天才で巨匠といえるだろう。（生徒作文）

文章の内容に衝撃を受けたにしてもまた筆者の文章が説得力のある文章であったにしても、全面的に受け入れてしまっている。

実践の概要

単元名　論理をとらえて
『君は「最後の晩餐」を知っているか』光村図書

目標	筆者の主張に対し、根拠や理由を明らかにして、反論する文章を書く。
内容	• 筆者の主張に対して納得できない点、同意できない点を考え、メモを取る。
	• メモをもとに班で話し合う。　※テーマを絞り、内容の深まる話し合いにする。
	• 下書き、推敲、清書する。
	• 班で交流する。

学習内容の系統と各学年に見られるつまずき

	学習内容（単元名）		つまずきの実態
第3学年	慣用句・ことわざ・故事成語	→	論理の展開を工夫して、筋道の通った文章を書くことができない。
第2学年	**論理をとらえて**	→	**筆者の主張に対し、根拠を明らかにして反論する（否定的な）文章を書くことができない。**
第1学年	いにしえの心にふれる	→	根拠や理由を明らかにして、筋道の通った文章を書くことができない。

単元末の目指す姿

- 根拠を明らかにしながら、筆者の主張に対し反論する（否定的な）文章を書くことができるようになる。
- 評価の観点に沿って、書いた文章を客観的に推敲したり評価したりできるようになる。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❶

筆者の主張に対して納得できない点、同意できない点をグループで話し合わせる。

活動のねらい▶ • 反論する（否定的な意見を述べる）ためには、説得力のあるわかりやすい根拠が必要であることを理解する。

ここがポイント

• 班活動で納得できない点・同意できない点を話し合うことにより、班のメンバーのさまざまな視点や考え方を知ることができ、考えをより深めることができる。
※この活動では、反論に焦点を当てているが、批判的なものの見方や考え方は、根拠立てて共感することも含まれることを確認する。

観点を立てて話し合うことにより、内容を整理する

「理屈ではなくまず衝撃がやってくる。」
→衝撃が来なかったら名画じゃないのか。
→普通の人にはきっと衝撃なんか来ないよ。

「芸術は永遠なのだ。」
→絵の具が剥げ落ちて永遠はないよね。
→永遠に残したいと思わないからフレスコ技法ではなくテンペラ技法で描いたんだと思うな。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❷

普段文章を書く際に、筆者（作者）の主張に対して肯定的な意見や感想を書くだけでなく、批判的（否定的）な意見・感想を書くことも意識させる。

活動のねらい▶ • 様々な角度から分析したり、批評したりする力を育てる。

ここがポイント

• 3年生では、小見出しの効果について評価させたり、様々な観点を立て、対象を分析・批評したりすることが求められる。その際に求められるのが「批判的なものの見方・考え方」である。そこで、筆者の主張に対して共感するだけでなく、あえて反論する考えや根拠を挙げさせることにより、「批判的（否定的）なものの見方・考え方」を育てる。
• 指導にあたっては、観点に沿って根拠を話し合わせることに重点を置き、単なる思いつきや感情による反論にならないよう留意したい。また、話し合いの後は180字から200字程度の文章にまとめさせ、相互評価させたい。

関連する学習

＊メロスの言動について批判的に書く。（第2学年「走れメロス」）
＊筆者の考えた「小見出し」は適当かどうか批評する。（第3学年「月の起源を探る」）
＊新聞広告を批評する。（第3学年「批評文を書く」）

第3学年 書くこと②

ことわざと体験を結び付けて、2段落構成の作文を書く

つまずきの実態
～こんな生徒の姿が見られませんか？～

論理の展開を工夫して、筋道の通った文章を書くことができない。

■「小見出しの効果」について、肯定的又は否定的な意見を書く　「月の起源を探る」（光村図書3年）

「月を作る」という言葉が聞き慣れないので、面白いなと考えました。どうしたら月を作ることができるかなどの疑問が自然と出てきます。その後の「実験」という言葉も、実験なんて実際にできるのかと驚きました。たったこれだけの言葉で、疑問と驚きが出てきたので、個人的にとても良い見出しだなと考えました。言葉の選び方がとても面白いです。（生徒作文）

考えを書き連ねることはできるが、接続語や段落構成が意識できていないので、論理の展開がつかみにくい文章になっている。

実践の概要

教材名　「慣用句・ことわざ・故事成語」　光村図書

目標	ことわざと体験を結び付けて、2段落構成の作文を書く（200字作文）。
内容	• ことわざとそれに込められた教訓について学習する。 • 選んだことわざに合う体験・エピソードを考える。 • 下書き→推敲→交流→清書する。

学習内容の系統と各学年に見られるつまずき

	学習内容（単元名）	つまずきの実態
第3学年	慣用句・ことわざ・故事成語	論理の展開を工夫して、筋道の通った文章を書くことができない。
第2学年	論理をとらえて	筆者の主張に対し、根拠を明らかにして反論する（否定的な）文章を書くことができない。
第1学年	いにしえの心にふれる	根拠や理由を明らかにして、筋道の通った文章を書くことができない。

単元末の目指す姿

- 段落の内容を整理して、筋道の通った２段落作文を書くことができる。
- 文章を客観的に推敲したり、評価したりできるようになる。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❶

体験をはじめに書くAパターンと、体験を後に書くBパターンを提示し、モデル作文をもとにどちらが効果的かを検討させる。

活動のねらい▶ • 体験とことわざをどう関連させるかが鍵であることに気付かせる。

ワークシート

段落構成を考えよう

※Aパターン、Bパターンどちらが良い？

A	B
①具体的な体験・学んだこと	①ことわざやその意味
②ことわざやその意味	②具体的な体験・学んだこと

選んだパターン（　　）

●理由

例文① Aパターンの作文

秋祭りの準備の日、僕たち中学生は、みこしの組み立てに駆り出された。だが、指導に当たる大人が多くおられ、個々に異なる指示を出されるので、どう動けば良いのかわからず、結局作業に長い時間がかかってしまった。

「船頭多くして船山に上る」ということわざがあるが、指図する人が多すぎると、かえって物事がうまく運ばないということを実感した。会社に社長が複数存在しないのは、そういうことも関係しているかもしれない。

20×10

ここがポイント

- まずは、A･Bどちらのパターンで書く方が説得力のある文章になるか、自分の考えを書かせる。（左:ワークシート）
- その後、Aパターン、Bパターンそれぞれのモデル作文（右）を読ませ、文章の流れや構成を検討させる。これにより､論理的な展開･構成をより意識するようになる。

つまずき解消に向けた指導の工夫 ❷

下書きの後、推敲が必要な箇所に付箋を貼り、気付いたことを記入しながら、班で交流させる。

活動のねらい▶ • 下書き原稿を交流・推敲することにより、よりよい文章を書こうという意欲が喚起される。

ここがポイント

よい文章を書くためには、推敲が欠かせない。だが、自分で自分の文章を読み返すだけでは、どこが問題なのかがわかりにくい。そこで、付箋を用いて相互に評価し合う場を設定する。これにより、友達の良い点をまねたり、自分の文章の改善点を見つけたりできる。その際、「論理的な展開・構成になっているか」など、本単元のねらいに沿った視点を確認しておくことが大切である。

付箋を用いた交流

（期待される生徒の姿）

班活動を取り入れ、良い点や改善点を話し合わせることにより、良い文章を書こうという意識が高まる。また、構成の仕方によって説得力に差ができることを実感できる。

また、書き出し→結び→下書き→清書と段階を追って書き進めることで、書くことへの苦手意識が軽減される。